(東女医大誌　第51巻　第5号
頁　525～528　昭和56年5月)

〔学　　会〕

東京女子医科大学学会　第237回例会抄録

日時　昭和56年2月27日（金）　午後1時30分より
場所　東京女子医科大学本部講堂

1．ヒト胎児重複奇形児の解剖学的研究；複対称性頭胸結合重複奇形児の内臓の位置関係について

（第1解剖）
○関口　幸子・永野　貞子・久保田くら

複対称性頭胸結合重複奇形児に相当する1例について，Schwalbe の結合軸の概念を応用して，内臓の位置関係の立体的な観察を試み，以下の結果を得た．

1）本例は，胎齢約10カ月の平等に発育した双胎女児が，互いに向い合つた状態で，各々の前面で頭部から臍部まで結合している．2児の後頭部，頂部，背部，腰部，臀部，臍以下の下腹部および四肢は各々分離している．2児の結合部には，2児の異名半側同士の結合により形成されると考えられている2児の正中矢状面に平行の，2つの2次面（A面，B面）を認める．

2）上記の2次面（X面），2児の各々の本来の前頭面（Y面），および2児の水平面（Z面）との3面に対する内臓の位置的関係を観ると，胸部および上腹部（結合部）の諸臓器は，主として，2次面（X面）に平行に位置するが，2児の臍以下で分離しつつある下腹部の諸臓器は，水平面（Z面）および結合面（Y面）に平行の位置をとる．

3）特異的な内臓の位置異常としては，横隔膜の一部の欠損部より，肝臓，脾臓，胃の胸腔内への陥入が認められた．

2．再び心臓腫瘍の剖検例について

（第2病理）○梶田　昭・西川　俊郎・
中谷　雄三・金井　孝夫
（内科Ⅰ）藤川　晃成

第223回例会において，心臓原発の腫瘍例について報告したが，それらはいわゆる良性（過誤腫性）の腫瘍に属するものであつた．今回は，教室で経験した悪性心腫瘍例の剖検3例について報告したい．

第1例（# 7015）　45歳　男性．咳嗽，呼吸困難を主症状とし，心のう液貯溜，肺野の円形陰影が証明された．心のう液の貯溜は穿刺を繰返しても持続し，およそ7カ月の経過で死亡．剖検上，心膜，心基部結合織を中心とする腫瘍の発育と左側胸膜への浸潤が認められ，転移は肺および肺門・後腹膜リンパ節に証明された．腫瘍の拡がり，組織像によつて心膜中皮腫と診断した．

第2例（# 8363）　54歳　男性．胸痛，咳嗽を主訴とし，某病院で肺肉腫が疑われ，54年9月内科Ⅰに入院．心電図上，頻拍，心房細動，低電位差を示し，心エコー図によつて左心耳腫瘍の所見がえられた．55年3月死亡．剖検上，心房壁，大血管起始部を中心とする腫瘍の発育が認められ，両心室壁への浸潤，右房腔の圧迫性狭小化・肺静脈・下大静脈口の圧迫性狭窄を伴う．組織学的には，紡錘形細胞肉腫の像であつた．

第3例（# 8324）　50歳　女性．呼吸困難，胸痛を主訴として受診．縦隔除影異常を指摘されて入院．CT scan によつて前縦隔腫瘍，心外膜への浸潤が疑われ，左側鎖骨窩リンパ節の生検で未分化癌の所見がえられた．約2カ月の経過で死亡．剖検上，悪性リンパ腫（lymphocytic lymphoma）の全身的な発育が認められ，おそらく後膜膜域が原発部位と推定された．心膜（および心筋）にびまん性浸潤があつて，肝にはこれに基づく強い慢性うつ血の像がみられた．

第1例は心膜由来の悪性中皮腫，第2例は心臓（おそらく心房）原発の肉腫の例であり，第3例は悪性リンパ腫の全身的発育の一部として心膜・心筋のびまん性腫瘍浸潤がみられたものである．

3．NICU と心疾患

（心研小児科）○疋田　房子
（小児科）浦本　恭子

先天性心疾患の自然歴では，新生児期の罹病，死亡率